

現代形容語彙の構造

——「分類語彙表」の「相の類」の分析——

玉村文郎

目 次

はじめに

I 「相の類」の語数についての概観

II 形容動詞の語彙構造上の性格

II-1 形容動詞の優位性

II-2 形容詞の補完物としての形容動詞

III 和語形容動詞の語彙構造上の性格

III-1 和語形容動詞の概観

III-2 形容詞の多い分野

III-3 和語形容動詞の多い分野

III-4 形容詞・和語形容動詞のともに多い分野

III-5 形容詞と和語形容動詞のゼロ項目の重なり

III-6 形容詞と和語形容動詞のちがひ

IV 形容語彙総数

V 和語と外来成分

VI 漢語と洋語

VII まとめ

おわりに

はじめに

国語の形容詞の語彙論上の特質について、筆者は先に「分類語彙表」の「相の類」の語彙を調べて、概括的な考察を試みたが、^①なおいわゆる「形容動詞」との相互関係や語種とのかかわり、さらには巨視的にとらえた形容語彙の構造などについては、多

く論じ残した。そこで、前考にもとづいて、語の分布を軸に分析と考察を進めることにする。

I 「相の類」の語数についての概観

国立国語研究所資料集6「分類語彙表」の「相の類」(分類番号3.)の3類の語数は次表のとおりである。

表1 形容語彙の分布

見出し	分類番号	項目数	全語数	形容詞数	形容動詞数			計B	B/A	A+B	A+B/ 項目数
				A	和語	漢語	洋語				
抽象的關係	3.1	39	2,192	168	82	320	19	421	2,506	589	15.10
精神および行為	3.3	31	1,778	310	133	537	23	693	2,236	1,003	32.36
自然現象	3.5	14	644	112	38	87	2	127	1,134	239	17.07
相の類全体	3.	84	4,614	590	253	944	44	1,241	2,103	1,831	21.80

表1から、次の諸事項を導き出すことができる。

- ①形容詞・形容動詞の類は、「精神および行為」(3.3)において、全語数1,831語の過半数(54.78%)を占めるが、「抽象的關係」(3.1),「自然現象」(3.5)の順で語数が減少する。したがって、品詞としての形容詞・形容動詞は、「相の類」の3区分の中では、「精神および行為」(3.3)にとくに厚く分布している。
- ②1分類項目あたりの語数から見ると、57.36語(3.3), 56.21語(3.1), 46.0語(3.5)という順になるが、3区分の間の語数上の開きは極端に小さくなる。全84項目の平均では54.93語となっている。
- ③全語数に対する形容詞・形容動詞の百分率は、56.41%(3.3), 37.11%(3.5), 26.87%(3.1)の順となり、やはり「精神および行為」の類が過半数を占めているのが注目される。「相の類」全体では39.68%である。
- ④1分類項目あたりの形容詞・形容動詞の語数の和は、32.36語(3.3), 17.07語(3.5), 15.10語(3.1)の順となり、全体では21.8語平均となって、やはり、「精神および行為」(3.3)の類にもっとも厚く形容詞・形容動詞が分布していることがわかる。

II 形容動詞の語彙構造上の性格

II-1 形容動詞の優位性

形容詞の分布と形容動詞の分布とを観察すると、いずれの類においても、形容詞より形容動詞の方が多いことがわかる。さらに、表1の中の数値をもとにして、3類のそれぞれにおける形容動詞数の形容詞数に対する比を求めると、2.506 (3.1), 2.236 (3.3), 1.134 (3.5) となり、全体では2.103となって、形容語彙の少なかった「抽象的關係」(3.1)において、形容動詞の比率が高くなることはすこぶる示唆的である。

形容詞と形容動詞の多少を「相の類」の全項目にわたって調べると、

形容動詞の方が多い項目数	59
形容詞の方が多い項目数	16
同数である項目数	1
ともにゼロである項目数	8

のようになり、84項目中59項目においては形容動詞の方が多く、形容詞の方の多い16項目の4倍近くの項目にわたっていて、全体として形容動詞の優位性は動かしがたいものとなっている。

いま、形容詞のない分野を数えると、84項目中24項目に及び、28.6%を占めている。その内訳は、「抽象的關係」(3.1)で14項、「精神および行為」(3.3)で6項、「自然現象」(3.5)で4項であるが、このうち、形容動詞もない分野は次の8項である。

時 (3.160), すぐ・次第になど (3.161), 過現未 (3.164), まだ・もう・やっと・また (3.165), 翌・次 (3.167), 関係位置 (3.171), くらい・ほど (3.199₁), 火 (3.516)

これらの8項目は、いわば名詞性と副詞性をつなぐ線の上にある語群であって、非形容詞的であると考えられるのであるが、8項目中、(3.516)の1項を除いて、他はすべて「抽象的關係」(3.1)に分類される語彙群であること、また、「精神および行為」(3.3)の類には1項目も存しないことに注意すべきであろう。

II-2 形容詞の補完物としての形容動詞

形容詞が本来的に多くの語数を要しない語詞でありながら、しかも言語ごとに、やはり絶対的な語数においても相対的な語数においても相当な差の生ずること、また、わが日本語では、ことに語数が少なく、使用頻度の高いものが少ないことなどは、すで

に前考において見たとおりである。そして、この形容詞の語数の僅少さや語の用法上のかたよりにからくる表現機能の低下を補強するものとして、いわゆる「形容動詞」が大きなはたらきをしていることも、前考で併せて指摘したところである。前節において見たとおり、形容語彙全体の中に占める形容動詞の位置がそれを有力に裏書きしている。それは、形容詞の少ない項目に一定数の形容動詞が分布していることによつてのみならず、形容詞のきわだって多い項目の多くにまた形容動詞が多く見られることによつても、一層明白なこととなる。(例えば、激力、長い・広い、苦しい・悲しい・こわい、偉い・けち・すごい・不屈き、ていねい・親切、色 などの諸項目)

さらに、形容動詞より形容詞の方が多いのは、下に挙げる16項目であるが、項目数の半数(*を付したものは、形容詞数の形容動詞数に対する比が2よりは小さく、形容動詞の形容詞に対する補完性が、ここからも看取できる)である。

さながら (3.114) 4/0, *可能性 (3.123) 16/9, 久しい・若い・早い (3.166₀) 9/2, *長い・広い (3.192₀) 22/18, *重い・軽い (3.193) 5/4, *意識・感覚 (3.300) 19/17, *驚き・楽しい・快い (3.301₀) 18/14, *苦しい・悲しい・こわい (3.301₁) 30/21, はずかしい・ほしい・くやしい・ありがたい (3.301₂) 33/5, 好き・きらい・かわいい・にくらしい (3.302) 54/13, 仕事 (3.332) 2/1, 身上 (3.340) 2/1, *色 (3.502) 24/13, におい (3.504) 11/0, 味 (3.505) 19/6, *気象 (3.515) 15/11

Ⅲ 和語形容動詞の語彙構造上の性格

Ⅲ-1 和語形容動詞の概観

これまではもっぱら品詞別区分から、形容詞全体と形容動詞全体との分布関係をとらえてきたが、それは語彙論的な考察としては、なお一面的であろう。なぜなら、形容詞対形容動詞というとらえ方では、すでに上古から存在した和語形容動詞と形容詞との関係、および和語系形容語彙(すなわち形容詞と和語形容動詞)と外来性形容語彙(すなわち漢語・洋語の形容動詞)との関係が考察の域内にはいっていないからである。

表1を書きかえて、和語と外来成分とに整理しなおすと、次の表2が得られる。

詳細な分析は後にまわして、概略だけを述べるならば、和語形容動詞は総数において、形容詞の590語に対して253語であり、語彙として劣勢にあることは明瞭である。また分類諸項目においても、和語形容詞のない場合は多く和語形容動詞もなく、17項目

表2 形容語彙の分野と語種

見出し	分類番号	形容詞数	和語形容動詞数	和語計	漢語洋語計
抽象的關係	3.1	168	82	250	339
精神および行為	3.3	310	133	443	560
自然現象	3.5	112	38	150	89
相の類全体	3.	590	253	843	988

において形容詞をしのいでいるのみで、25項目においては同数、そして実に42項目において形容詞数に及ばないところから、一層具体的に和語形容動詞の弱さがわかってくる。そして、項目ごとの語数をグラフにしてみると、形容詞と和語形容動詞のカーブには、積極的に相補性や増幅性を認めさせるものがないから、結局、形容詞に対する和語形容動詞の補完性を認めるたしかな根拠はないと言わなければならない。

Ⅲ-2 形容詞の多い分野

「相の類」の分類項目の都合84項の中で、形容詞の多い分野は、次のとおりである。

- 好き・きらい・かわいい・にくらしい (3.302) 54語
 はずかしい・ほしい・くやしい・ありがたい (3.301₂) 33語
 苦しい・悲しい・こわい (3.301₁) 30語
 色 (3.502) 24語
 激力 (3.14), 長い・広い (3.192₀)
 ていねい・親切 (3.368) 各22語
偉い・けち・すごい・不屈き (3.341) 21語
 意識・感覚 (3.300), 味 (3.505) 各19語
 驚き・楽しい・快い (3.301₀) 18語

(ここでは、かりに分布18語以上の項目に限った。)

これらの11項目に属する形容詞の総計は284語で、全形容詞数590の48.14%である。つまり、84項目中、わずかに11項目に半数近くの形容詞が集中しているわけで、しかも24項目には形容詞の分布が見られないのであるから、「分類語彙表」の各分類項目に対する形容詞の分布には、相当大きい不均等性のあることがわかるのである。とくに、「精神および行為」(3.3)をとりあげると、上位7項目で全形容詞数の33.4%

を占めていて、この分野に対する形容詞の集中度の強さを一層鮮明にうかがいとることが出来る。

Ⅲ-3 和語形容動詞の多い分野

和語形容動詞は84項目中27項目ではゼロとなっているが、分布の多い項目順に上位11位までを挙げてみよう。

細心・勤勉・けなげ (3.348)	13語
形・丸い・平たい・荒 ^マ らい・まっすぐ・水平など (3.180~2)	11語
風俗 (3.330), 光 (3.501)	各10語
整い方 (3.113), 厚い・太い・大きい (3.192 ₁) ことば (3.31), 偉い・けち・すごい・不届き (3.341)	
純情・正直・慎重 (3.342)	各9語
くわしい・たしか・あやしい (3.306), みずから・あえて・ ぬけぬけ (3.346)	各8語

これらの上位11項目において、全和語形容動詞数253の41.5%となり、やはり集中傾向が見られる。また、11項目中の7項目が「精神および行為」(3.3)の類で、26.1%を占め、その中でも、「行動・性格の評価」に関する(3.34)のグループがまた多いことは注目していいことである。

Ⅲ-4 形容詞・和語形容動詞のともに多い分野

前2節において、形容詞の多い分野、和語形容動詞の多い分野を見てきたが、この分野群の重なりを見てみると、わずかに、「偉い・けち・すごい・不届き」(3.341)の1項しか重複項目は存在しないことがわかる。もちろん、前2節の「多い分野」というのは、量的には連続している分布項目列から、かりに上位11項目をとり出し、人為的な境界としたものであって、その境界自体には絶対的意味などはないのであるが、1項目しか上位群に重複が見られないという事実は、和語の世界にあっても、上位群では形容詞と形容動詞の分布にわずかながら相補的傾向のあることを推測させる。しかし、このような推測は、両群の語彙の分布を全分類項目にわたって吟味するまで留保すべきであり、なによりも、絶対数の少ない用例からの性急な結論とならないよう慎重に対処すべきことと思われる。

Ⅲ-5 形容詞と和語形容動詞のゼロ項目の重なり

ところで、反対に形容詞も和語形容動詞もそろってない分野はどうであろうか。形容詞のない項目数は24であり、和語形容動詞のない項目数は27であるが、両者が重複するのは、

*時 (3.160), *すぐ・次第になど (3.161), *過現未 (3.164), *まだ・もう・やっ
と・また (3.165), *翌・次 (3.167), *関係位置 (3.171), 場所 (3.172), ひとり
・みんな (3.198), *くらい・ほど (3.199₁), およそ・かつがつ・最も・もっと
(3.199₂), 意味 (3.307), 眼 (3.309), 衣食住 (3.333), 公式・公平 (3.360),
*火 (3.516), 地 (3.52), 生・性 (3.55), からだ (3.57)

の18項目に及んでいる。いずれか一方のみがゼロである項目数は15である。また、*印の8項は、形容詞も形容動詞もない分野であって、この8項は形容語彙化の実現しにくい分野であると考えられる。

ちなみに、形容詞、和語形容動詞の一方のみがゼロである15項目を挙げておこう。

○形容詞がゼロの項目 計6項

和語形容動詞1語 関係の仕方 (3.111)

しくしく・にこにこ・ぶりぶり (3.303)

2語 一度に・再び・毎度など (3.162)

3語 普通・非凡 (3.131)

8語 みずから・あえて・ぬけぬけ (3.346)

9語 整い方 (3.113)

○和語形容動詞がゼロの項目 計9項

形容詞 1語 水分 (3.513)

2語 仕事 (3.332), 身上 (3.340)

3語 相互・異同 (3.112)

4語 さながら (3.114)

9語 久しい・若い・早い (3.166₀)

11語 におい (3.504)

16語 可能性 (3.123)

33語 はずかしい・ほしい・くやしい・ありがたい (3.301₂)

合計15項

和語形容動詞のない項目の方が形容詞のない項目よりわずかながらも多いこと、和語形容動詞がなくて形容詞のある項目の方も、形容詞がなくて和語形容動詞のある項目より多いこと、とりわけ、形容詞16語、形容詞33語で、和語形容動詞ゼロの項があることなどから、形容語彙としての性格は、和語形容動詞の方が形容詞より弱いように思われる。このことは、和語形容動詞の絶対総数の少なさと、その分布も13が最高で、相対的な散らばりの小さいことから指摘できることである。

以上の考察から、形容詞に対する和語形容動詞の補完の割合ははかなり低いものであると結論していいであろう。

Ⅲ—6 形容詞と和語形容動詞のちがい

前節までに見てきた事項を別な観点から整理して、和語形容語彙の中の形容詞と形容動詞の2類の語彙的なちがいを考えてみよう。

まず第一は分布のしかたにおける差異である。形容詞は24項において分布ゼロであるから、分布項目は60項であり、和語形容動詞は27項において分布ゼロであるから、分布項目は57項である。したがって、形容詞の方がわずかではあるが、和語形容動詞より広い意味範囲に分布していると言える。(これを裏から言えば、形容詞があって和語形容動詞のない分野は、羞恥・欲求・残念・感謝・可能性・においなど9項目を数えるのに反して、和語形容動詞があって形容詞のない分野は、抽象的關係などの6項目であって、形容詞の方が広範囲に分布しているということになる。)

次に、語数を見ると、形容詞は590語で、和語形容動詞253語の2.33倍である。(表2参照) いま、和語形容動詞に対する形容詞の割合を類別にして示すと、

抽象的關係	(3.1)	2.05
精神および行為	(3.3)	2.33
自然現象	(3.5)	2.95

となつて、この比率は、「自然現象」、「精神および行為」、「抽象的關係」という順に小さくなっている。また、形容詞がなくて形容動詞のある分野は、分布数9と8の各1項を除けば、残りの4項は3語以下であるのにひきかえて、和語形容動詞がなくて形容詞のある分野は、分布数33, 16, 11, 9…というふうにきわめて語数の多い項目が存在していて、対照的である。

さらに意味の面に目を転じてみよう。84項の分類項目の分布を調べて、①形容詞・和語形容動詞の両群ともに分布の厚い分野、②形容詞の分布数の多い分野、③和語形

表3 グループ別和語形容語彙

	見出し	分類番号	形容詞数	和語形容動詞数	全形容語数
抽象的関係	こそあど・真正	3.10	2	3	21
	関係・異同	3.11	8	12	48
	存否・必然・可能	3.12	25	3	48
	程度・良否・調子	3.13	22	21	165
	激力	3.14	22	1	45
	変化・動き	3.15	2	2	18
	時間性	3.16	16	3	31
	空間性	3.17	0	0	4
	形状・表面	3.18	14	14	44
数・度量衡	3.19	57	23	165	
精神および行為	意識・情緒・判断	3.30	178	32	367
	ことば	3.31	12	9	34
	生活状態	3.33	29	19	145
	行動・性格の評価	3.34	58	62	307
	交渉	3.35	1	1	7
	対人性	3.36	22	7	88
	経済	3.37	10	3	55
自然現象	五感	3.50	84	24	152
	水・火・気	3.51	16	6	28
	地	3.52	0	0	8
	生・性	3.55	0	0	3
	からだ	3.57	0	0	2
	生育・健康	3.58	12	8	46

容動詞の分布数の多い分野, ④両群とも分布のうすい分野 というふうに, 4 種に類別することができよう。すでに, これまでの何節かで指摘してきたので, 個々の項目見出しや番号を挙げるのはさし控えるが, これらの4 種はそれぞれ, ①形容語彙の本来的に表象する意味分野, ②形容詞によって表象されやすい意味分野, ③和語形容動詞によって表象されやすい意味分野, ④形容語彙になじみにくい意味分野 というように考えられるであろう。

ここで, 分類番号の末位を除外して上位3 桁でまとめたグループ別リストを作成してみると, 表3 のようになる。当然, この分類は, やや広い視野から形容語彙をグループングしたものとなっている。見出し名はかりに私につけたものである。

こうしてみると, 前記①として「行動・性格の評価」(3.34); ②として「意識・情緒・判断」(3.30), 「五感」(3.50), 「数・度量衡」(3.19); ③なし; ④として「こそあど・真正」(3.10), 「変化」(3.15), 「空間性」(3.17), 「交渉」(3.35), 「地」(3.52), 「生・性」(3.55), 「からだ」(3.57) などを挙げるができる。意味範疇と語彙・品詞の関係が, このような操作によって, かなり明らかになってくるようである。

要約するに, 和語の内部における形容動詞の語彙的性格は質量両面において, ごく微弱であると見られるのである。

IV 形容語彙総数

これまでは, 「分類語彙表」の「相の類」(3.) の形容詞と形容動詞の関係, 形容詞と和語形容動詞の関係を見てきたのであるが, ここで, 形容詞・形容動詞を合算した形容語彙の総数について見てみることにする。

表4 総語数順上位項目

順位	見出し	分類番号	形容語彙総数	和語	漢語洋語
1	風 俗	3.330	99	25	74
2	ていねい・親切 (対人態度)	3.368	78	29	49
3	好き・きらい・かわ いい・にくらしい	3.302	67	61	6
4	偉い・けち・すご い・不届き	3.341	61	30	31
5.5	調子・出来	3.134	55	12	43
	経 済	3.37	55	13	42
7	快活・柔和・勇猛	3.345	52	22	30

8.5	苦しい・悲しい・ こわい	3.301 ₁	51	32	19
	くわしい・たしか・ あやしい	3.306	51	15	36
10.5	かしこい・おろか	3.304	46	17	29
	純情・正直・慎重	3.342	46	13	33
12	激 力	3.14	45	23	22
13	強気・勇敢・大胆	3.344	43	10	33
14	良・不良、適・不適	3.133	42	14	28
16	形・丸い・平たい・ 荒らい・まっすぐ・ 水平など	3.180-2	40	24	16
	長 い ・ 広 い	3.192 ₀	40	26	14
	厚い・太い・大きい	3.192 ₁	40	21	19

(上位17位まで)

総語数順に第17位までを挙げてみると(表3参照)、上位17位中、11項目までがやはり「精神および行為」の(3.3)の類で、計649語にのぼり、全体の35.45%を占めている。残りの6項目はまたことごとく「抽象的關係」(3.1)の類であって、第17位までには「自然現象」(3.5)の類は1項目も含まれていない。

なお、このうち、(3.302)、(3.301₁)、(3.14)などは、外来成分よりも和語の方が多い分野で、上位項目群の中では特異な存在であるが、中でも「好き・きらい・かわいい・にくらしい」の(3.302)は、和語61語に対して外来成分6語で、和語性のきわめて高い分野であることがわかる。

V 和語と外来成分

すでに前節で一部について言及したが、和語(固有日本語成分)と外来成分という分け方によって、形容語彙を整理分析してみよう。

和語・外来成分の多い項目の重複は、次に点線でつないで示したように、いずれも「精神および行為」の(3.3)の類であり、「評価・待遇」と深くかかわる意味分野であることに注意しなければならない。これらは、和語としてもととかなり多くの固有成分が分布していた項目であるが、さらに外来成分が相当数累加された意味分野である。したがって、これらの4項目の数値は、わが日本人の心性や表現のあり方と深く関連していると見ていいはずである。

現代形容語彙の構造

和語の多い分野			外来成分の多い分野		
1位	3,302	61語	1位	3,330	74語(風俗)
2	3,301 ₂	33〃	2	3,368	49〃(ていねい・親切)
3	3,301 ₁	32〃	3	3,134	43〃
4	3,341	30〃	4	3,37	42〃
5,5	3,368	29〃	5	3,306	36〃
〃	3,502	29〃	6,5	3,342	33〃
7	3,192 ₀	26〃	〃	3,344	33〃
8	3,330	25〃	8	3,341	31〃(偉い・けち・すごい・不屈)
9	3,180-2	24〃	9	3,345	30〃(快活・柔和・勇猛)
10	3,14	23〃	10	3,304	29〃
11	3,345	22〃	11	3,133	28〃
(3.1)	3項		(3.1)	2項	
(3.3)	7項		(3.3)	9項	
(3.5)	1項		(3.5)	なし	

次に、前掲の表2をもとにして、外来成分の和語に対する比を表にしてみると、表5のようになる。

表5 外来成分と和語の比

分類番号	外来成分 / 和語	形容動詞数 形容詞数
3.1	1,356	2,506
3.3	1,264	2,236
3.5	0,593	1,134
全	1,172	2,103

表5に見られる3類の順番は、形容動詞数の形容詞数に対する比の順と変わらず、「抽象的關係」、「精神および行為」、「自然現象」となるが、第1位と第2位の値は極度に接近しており、この両分野では、和語群に対する外来成分の補完度がほぼ同程度であることがわかってくる。そして、「自然現象」では和語の方が多くなって、形容動詞数対形容詞数の比率とは逆転している。このことから、「自然現象」(3.5)は、比較的固有なとらえ方でおおい得る分野であるか、あるいは外来成分のはいりこみに

くい分野であると見ることができるであろう。

VI 漢語と洋語

外来成分のうち、漢語形容動詞は全体で944語にのぼり、「相の類」の形容語彙総数1,831の51.56%を占めている。そして、その分布も71項目に達して（ゼロの項目は13項）、形容詞や和語形容動詞よりも分布が広範囲に及んでいることは顕著な事実である。具体的には、分類番号の何項目かにおいて、和語系形容語彙の補完物としての役割を積極的に果たしていることは明らかである。外来成分とは言っても、「分類語彙表」では圧倒的な部分は漢語であるから、前節において指摘した和語に対する外来成分の補完力の大半は、実は漢語のはたらきによるものにほかならなかったのである。

それに反して、外来成分のうち漢語を除外した残りの洋語は、総数で44語、形容動詞全数の3.55%、外来成分全体の4.45%であって、語彙的性格はきわめて弱いと見られる。類別に見ると(3.1)19語、(3.3)23語、(3.5)2語となっているが、このうち「風俗」(3.330)に14語分布しているのは特筆に値する。その他では、4語・3語の分野が各1項、2語の分野が4項、あとは15項が各1語であって、分布ゼロの分野が62項にものぼっている。したがって、洋語の分布は、きわめて部分的で微少で、かつ不均等であると言わなければならない。

VII ま と め

以上、前考の延長として、「分類語彙表」の「相の類」の語種・語数を分析し、現代日本語の形容語彙の構造的な性格を考えてきた。最後に、小論の要約をしておこう。

- 1) 形容詞・形容動詞は、「風俗」(3.330)、「ていねい・親切(対人態度)」(3.368)などに代表される「生活状態」や「行動・性格の評価」の分野に多く分布し、逆に(3.15)～(3.17)の「抽象的關係」においてきわめて少ない。
- 2) 分布の厚い意味分野では、多くの和語の上に、また多くの外来成分が累加されて、語数の増幅現象を呈している。
- 3) 「自然現象」(3.5)は、相対的に形容動詞・外来成分の分布のうすい意味分野である。
- 4) 形容詞は、とくに(3.30)の「意識・情緒・判断」の分野への集中率が高い。
- 5) 和語形容動詞は語類としてはあまり大きくはなく、形容詞に対する補完度も小

さい。

- 6) 「相の類」全体としては、漢語形容動詞の層の厚さが特筆されるべきことである。

おわりに

小論は冒頭に述べたとおり、国立国語研究所資料集6「分類語彙表」の「相の類」に収められた形容詞・形容動詞についての考察である。「分類語彙表」自体は、すでに指摘^③のあるとおり、完全な「日本語語彙表」ではないので、当然のことながら、小論での分析や考察や言及は、どこまでも「分類語彙表」の枠内のものという限定をつけられるべきものである。今日、「相の類」に分類されるべき「洋語形容動詞」が漸増ないしは急増していることに気づかぬ人は少ないであろうが、そういう「分類語彙表」外のことどもは小論の延長線上にはあっても、直接射程の中にははいっていないのである。小論は、現在日本で高頻度で使用される語彙を中心にした基本的な語彙約32,600語の内部における形容語彙の構造についての考察なのである。形容語彙に関する通時的な考察、語構成の研究などについては、別の機会をまちたい。

注

- ① 「語彙論から見た形容詞」(「同志社国文学」第十号所収)
- ② ここでは「形容語彙」を「形容詞」といわゆる「形容動詞」の総称として使用することとする。
- ③ 柴田 武氏の昭和46年春季国語学会大会のフォーラムにおける発言
前田富祺氏「語彙の体系について」(「東北大学教養部紀要」第十九号所収)
- ④ 「分類語彙表」—まえがき—(7ページ)